夜に実る

元内和弘

漏れ出る吐息は白く、粉塵で覆われた天は真っ黒に染まった。他人の物で染めた手は赤く、ロシアの血が流れる瞳だけが青い。明るい蝋燭の灯りの元で、暗い寒さは空腹を用いて人の本質を試す。

指の先が凍り付いて砕かれていく一九四二年の秋。都市に繋がる全ての道はことごとく潰され、数えきれない人々が飢えと銃弾によって体温を失った。国からの補給は不味いパン数枚のみ。それすらも既に半分がおかくず混じりのゴミと化している。

何時死ぬか分からない恐怖に如何なる聖人の精神をも粉砕された。倒れそうな空腹はやせ細ったネズミをしゃぶらせ、酒なしでは削られていく希望にすら酔えない。人類が積み重ねて作った、絵画と文字列の数々は一燃えくさとなり下がり、同種食いをしてしまった連中が射殺されたというニュースが人口伝えに耳に届いてきた。いよいよ残された道は他人の物を奪う事だけだと誰もが思ったはずだろう。

奪い取る事こそ正義であり、抗えないのは非力の証明でしかないのだと。きっと誰もが思ったはずだ。いや、思っていた。

銃口を目に男は俺の足首にしがみ付いてきた。

「本当にもう食べる物は何もないのです！　家内も、子も腹を空かせているます！」

寒くて腹が減った。

周囲の家を燃やしてでも暖かい場所に居たいと願い、人を殺してでも食べ物を探し求めるようになるに時間は余り掛からなかった。もう死んでも良いとさえ思ったのにも、次の日には略奪してでも腹を満たしたくなる。

「すまないが、そんな事実は俺の知った事じゃない」

目を細ませて俺は銃で男の足を打ち抜く。悲鳴が町中に轟き、赤い鮮血が床に流れて絨毯を染めた。しかしそんな物は煮ても焼いても食べられない。

隣部屋からタンスが開かれ、小汚い少女が男に抱き着いてきた。開かれたタンスには幾つかの缶詰が積んである。

「あるじゃないか。残されたのがあるじゃないか！　あんた良い人だな。とても助かるよ」

感謝の言葉を送って缶詰に手を伸ばすとタンスの中にいた女性が腕にしがみ付いてきた。それに対して勝手に拳が振るわれる。手袋越しなのにも、手の甲に嫌な感触が染みついた。反射的に擦ってみるが、べっとりとついた感覚を薄める事はできない。

「抵抗するな。弾丸だってただじゃないんだ。それに人の肉は食べない主義なんでな」

連中を背に家から出ると砲口と銃口から立つ煙と街を燃やし尽くした灰が天を覆っていた。昼の天は暗く、あまねく地上を照らしていた太陽は姿も見えない。

神に祈れば爆撃が落ち、祈らなければ流れ弾に撃たれ、恐怖に振えよう物なら全てを奪われる。こんな世界で俺のような力しか頼る事のない人間にできるのは他人の品

を奪い取る事だけだ。
そう、こうやって生きるしかできない運命にある。こうやって生きて、こうやって死ぬだけの定めにあるのだ。
(だから仕方ない。仕方ない事だ)
「殺してやる。次は問答無用で撃つ」
悪態をつきながら車に戻っていくと開けた道に、赤ずんだカーキ色のロングコートを着込んだ一人の男が立っていた。長い髭を生やし、血の付いた斧が握られている。白く色褪せた髪に光のない黒い瞳は威圧感を宿していた。
毎日顔を合わせているにも血の跡に圧倒される。そんな俺にアブラモフさんの方が先に気付いた。
「気持ちのいい朝だなユスチン」
「アブラモフさん、どうでしたか?」
「薬品とか色々と。そっちの収獲はあったか?」
「食べ物と弾薬です。まだ食べられそうな瓶詰も幾つか。ですが、残念ながらもこの近辺は漁り終えてしまったのか知れません」
サーヴィチ・アブラモフ。現在俺が身を置いている集団、言わば強盗団の団長とも呼べる方だ。包囲戦開始から数ヵ月、数万が餓死する中で俺が生きられるのもこの人のお陰だろう。
「そうだな。また連中が性懲りもなく何処かから品々を溜め込むまで対象を変えるとしよう」
アブラモフさんは取り出した地図に、皮手袋に付いた血で文字を書く。日付と読めない文字の羅列だが、文盲の俺なんかが見た所で理解もできまい。
アジトに戻っていく車の中ではラジオが流れていた。音声の状態が酷いせいでなんの話を呟いているのやら見当もつかなかったが、助手席では常にアジト、国軍、敵軍の位置までを復習して地図を修正していく。
「興味でもあるのか?」
横目で見やっていたのが気に障ったのか、こっちを見る事なく一言を放った。俺は軽く首を横に振って運転に集中する。
「いいえ、どうせ俺なんかに見ても分かりませんから」
「そうか。賢明な選択だ」
幾ら車輪を回そうが晴れた天は出てこなかった。前が見えるだけの暗闇を走り抜けていくと何処もかしこも壊れかけている。人が心を休ませるべき家も、腹を満たすべき補給線も、寒さを耐えさせてくれる意志と共に。
ハンドルを握っていると頭の中が少しずつ雲っていった。余計な考え、解決しない悩み、改善できない現実、そんな諸々が言葉では表せないイラつきになっていく。
アジトに戻って不味い食事を終えると、その感覚は少し和らいだ。
「なんだってんだ一体。俺は、俺に出来る事をしただけだろうが、何も間違っちゃいないはずだぞ」
「クソが」と汚い単語が後を追って出てきた。意図したのではなく、腹の底から込み上げてきてしまったのである。
アブラモフさんが無視するように言い聞かせ、仲間の多くが目を逸らせたその感覚に俺は未だ未練が残っていた。「罪悪感」等と言われる余計な感覚に未だ未練が残っている。
数日が経った。終わらないようで、寧ろ我が国の軍が押されつつある包囲の状況にアジトの位置を変える事に決める。実に今、最後にこの周辺で回収できる限りを探ろうと話し合っていた。
「ユスチン」
「はい」
「北上するに当たって君とアガーポフにはアストリアホテル周辺捜索を任せたい」
人差し指が叩いた地図の場所を見ると何となく位置を把握できた。文字は何一つ読めないが、地形や景観を描く。
「了解です。終わり次第そちらに向かいましょう」
「頼む。勿論だが銃と食料を持っていくのは忘れないように、間違っても軍に掴まれるなんて事はないように心がけろ」
「そのような事は」
「ない。という断定は控えろユスチン。油断の前にはいつだって断言がつき物だ」
瓦礫を踏んで進む度に車が軽く跳ねた。尻から背筋を伝って全身にその衝撃に打たれる。最初は尻の痣で済むが、段々無視できないくらいイラつかせる厄介な問題だ。
「ホテルか。戦争前まで泊った事もないのにな」
アガーポフはいつもの笑みを浮かべていた。奴は目だけ笑っていないのにも、その唇の端を落す事がない。面と向かって話をしているとどうも気味が悪く、けれどことなく馴染みのある男であった。
「皆同じだろうよ。俺だって同じさ」
「いっその事アジトにしてしまえば済む話じゃないか?」
「それはアブラモフさんが決定すべき部分だ。何かアジトには適しない理由があるのかも知れん。見当すら付かないがな」
「確かにごろつき共がたむろっている可能性は高そうだぜ。その時はこのアガーポフ様が全員撃ち殺してやるけどな」

自分の小銃の手入れをしながら笑みを深めるが、未だに目は笑っていない。まるで顔の上下が別れてしまったような、若しくは目だけが違う景色を見てしまっているような、不思議とそんな風に感じた。俺は何も返す事なくウォッカを飲んで酒瓶を渡す。
「ありがとう。私の分は飲み干しちまって困っていた所だったからよ」
「寒いからな今年の夜は」
「いつだって夜は寒くて当たり前だろうよ」
思わず昔話でも取り出す所だった。何気なく「どんな風に生きていたんだ」等と、「戦争が起きる前はどうだった？」等と口走ってしまいそうになったのである。そんな物、もう今更思い出した所で死にたくなるだけだというのに。
「まあな。夜はな」

ホテルを回ってみたが既に役に立ちそうな物は何も残っていなかった。住み着いている連中を数人始末したが、それ以外何ともない。幾らか予想はできていた事だ。でなければこの周辺をたった二人で調べろという事も先ずなかっただろう。
「抜け殻、若しくは残骸だな。少なくても私には役に立ちそうな物が見当たらねぇぜ」
「立派な建物なのにな。それにこの周辺に言える事だが砲撃の被害も少ない」
八つ当たりでもするかのように壊れた残骸を蹴ったり、何でもない瓦礫を転がしながらアガーポフが舌を打った。
「確かに。この近くだと崩れても可笑しくはないんだが……ん？」
一旦アジトの方に帰ろう。そう言いだそうとしていた時、俺達は二人同時にある建物に目を向けた。何をする場所かは分からないが随分と立派な煉瓦の建物に、回りは植林だらけの建物である。窓も全て木の板で塞がれていて、まるで誰かが意図的に要塞化したように思えた。
遠くから様子を見ていると地面にトラックが通ったタイヤの跡が見える。しかも落ち葉を踏んで、また積もっては踏んでを最近まで繰り返した跡だ。
「何かを運んでいるとか、運び出しているとかか？」
「分からん。でも胡散臭いのは確かだぜユスチン。以外と食料貯蔵庫だったりしてな」
「いや、流石に軍の施設に警備一人ないというのはありえないと思うが」
それくらい分かる。気になるのは一体誰がこんな場所に陣取って閉じこもるかという点だ。
「何であれ持ち帰る収獲がないというのも味気ない。何かは持って帰ろう。何かはな」
「それには同意するよ」
少し考えていると腹から音がした。腹が減っている。そのたった一つが全ての思考を遮って首を縦に振らせた。
「何だって良い。人がいれば、きっと食べ物もある」
何処もかしこも木の板が打ち付けられているおかげで俺達は歩いて建物まで向かう事ができた。砲撃や流れ弾等でガラスが割れるのは当然として、完全に防ぐというのも極端だ。が、寒い風を避ける為の措置だというなら納得はいく。
のだが、他のどの家とも異なるのが一点。木の板を剥いで直ぐ、俺達は同時に妙な所に気付く。
「『暖かい風だ』」
火を浴びているような暖かさでは勿論ない。寧ろそれで言えば寒いくらいだが、外と比べ温度が格段に高いという話だ。廊下には誰もいないけど人が通った跡は真新しく、それ等はこの場所で身構えている連中の存在を強く主張している。
(見回りの跡、とするとやはり何かを守っている？)
内部に入ったのにも閉鎖された空間で足音も話し声も聞こえない。得体の知れない存在に足を引っ張られているような、いつもの感覚に襲われながらも最大限注意を緩めず一番近くの部屋に足を運んだ。
「鍵が掛かっているな。撃って壊すか」
「音が大きすぎる。一様ピッキングを試してからにしよう」
銃声は大きい。実際、見えもしない前線での爆音は数キロも離れている家の中でも聞こえるくらいだ。ここで銃を撃てば近所の地下にまで響くだろう。
アジトにいた強盗から学んだ通りに扉を開いて倉庫に足を踏み入れた。そして広がる光景を目にした瞬間、耐えがたい程の希望に身を震わせる。
「な、何じゃここは。どういう事だよこれりゃ。夢じゃないよなユスチン！」
「この都市に、こんな場所が残っているだと？」
そこには見渡す限りの作物が保管されていた。芋、トウモロコシ、さつま芋とそれ以外でも数十の、名前も知らないような食べ物が箱詰めにされている。それこそ空いている棚がないくらいに。
「凄い。全部食べられる物なのか？」
「一部でも良いからよ。いや、いっそ箱ごと持ち帰ろうぜ。ここに来たのは大正解だった！」
食料貯蔵庫に見えるそこで、残りの箱を覆っていた布を捲ってみた。どの箱にもなんらかの植物が一杯である。
そんな時背中の方から足音がした。癖のように振り向

くとそこには一人の男が充血した目でこちらに銃を向けている。
「アガーポフ！」
箱の中を確かめながら喜びに目を笑わせていた奴は、その次の瞬間銃弾を頭に撃ち込まれた。
即座にリボルバーを向けるべく男の方に目をやると、いつの間にか投げつけられた木材目の前に迫っている。完全な油断からの衝撃が頭を揺さぶり、一瞬で床が近づいてきた。視野が九十度回転し、全てが大きく傾いて行く。
「貴様等は、一体……」
額からの血で赤く染った視界を二人の男が立ち塞いだ。俺は落したリボルバーに手を伸ばしたが、一人がこちらを見下ろしながらそれを取っていく。
「自分はただの研究者ですよ。今は無職に近い気もしますが、心だけは満ちていますとも。では死なない程度にお願いします」
「慣れない事をするのは良くないが、手加減してみるさ」
状況を把握する暇もなく、振り下ろされた銃床に頭を殴られた。それを認知できて直ぐ、真っ暗な世界に突き落とされる。

凡そまともな思考能力を取り戻せた時には、既に薄暗い裏路地で虫のように生き伸びていた。捨てられた家を転々とし、傷つけて物を奪って生きてきたのである。
俺にはそれ以外の方法が分からなかった。誰も教えてくれなかったし、周囲の大人も皆同じだったのだろう。
いつも裕福に生きて物を奪われる役と、いつも貧乏で物を奪う役がいる。そうだとばかり思っていた。物が何処から来て誰が作るのかという考えには至れず、そこに至るだけの知識もなかったのだ。
「寒い。腹が減った」
始めて周囲を真似て発音できた言葉だった。感覚がなくなった肌が割れて血が滲み出るのが「寒い」で、目に見える物なら石ころでもそのまま口にしてしまうのが「腹が減った」である。
その二つを忘れられるのなら、呟かずに済むのなら他は何でもよかった。他の事なんてどうでも、良かったはずだ。

目を覚ますと数人に囲まれた状態で手足を縛られていた。縄は固いが手慣れていない感じで、そのままでも骨が外れてしまうくらい力任せの結び方をしている。
「強盗野郎が目を覚ましたぞ」
「そんな言い方は辞めておきましょう。彼にも名前がありますから」
「死なないで欲しいという気持ちで手加減したんだが、それでもこんな早く起きる物なのか」
珍しい物でも見るように見やってくるも、その全員が憔悴していた。一体どれ程の間を凌いだのか分からないが、近い内に道端で死んでしまう手前の様子である。
「筋合いもありませんが、乱暴を働いた事は詫びましょう。私はこのパブロフスク実験所の現所長を勤めさせて頂いているニコライ・イワノフと申します。貴方の名前はなんですか？」
汚れた背広をきちんと整えた、淡々としている印象の男だった。低いながらもゆったりとした声は人を落ち着かせる力がある。だが、そんな事はどうでも良い。俺の目には未だあの部屋で見た食べ物が焼き付いてあるのだから。
「一体ここは何処だ。あの大量の食料はなんだ。まさか溜め込んでいるというのか？」
「食料という表現は少し間違っていますが、溜め込んでいるのは事実です。この実験所はその為の保管所として現在維持されているのですから」
「ニコライ所長、強盗野郎にそこまで教える必要はありません！」
「まあまあ、彼は話が通じる人のようです。先ずは会話をするべきでしょう。少なくともこの状況で齧りついてこない。人間として最低限の自制心はある方だと見受けられます」
所長と呼ばれる男は微笑よりも薄い笑みを浮かばせながら的外れな事を周囲に説いた。俺に取っては好都合だが、言い方はかなりイラつく。
(いや、こんな状況じゃ殺されないだけでもありがたい事か)
「良くもあれだけ集められた物だな。溜め込んでいる物をこの人員で分け合えば、確かに終戦まで持ち応えられそうだ」
俺がそう言うと突然そこにいた全員が笑みを零した。失笑に苦笑に微笑に、それでも声を出して笑う者はいない。首を傾げているとニコライ・イワノフは訳の分からない事を言い出す。
「私達はあれ等に手は出しませんとも。決してあの種達を口にする事はありません」
「なに？」
心底何を言っているのか分からない。食べ物を溜め込んで食べない等とバカみたいな事をする理由が何処にあるというのか。
「売って金にしても、使い道がないはずだが？」

「売りもしません」
「なに？」
訳が分からない。
その場の皆が腹を空かせているのにも食料を喰わない等、もしかすると餓死で自殺を図っているとでも言うのだろうか。とすれば愚かの極みだと誰もが嘲笑うはずだ。銃があるのにわざわざ腹を空かせてから死のうとするとは、随分と頭の可笑しな場所に迷い込んでしまったらしい。
得体の知らない連中に妙な拒否感を感じていた矢先、またしてもイワノフというやらがいかれた事を言い出す。
「ここでは現在三十万に至る種を保管しています。元は三十七万はいたのですけど。かなりの数が失われてしまいました。しかし私達は残りを守り、保存し、後世に届ける為にここにあるのです」
「後世に届ける？」
「はい。後々この種はソ連の、引いては世界中の食料問題を解決してくれるかも知れませんからね。希望の種、少し恥ずかしいですが大袈裟に言えばそういう事です」
皆がそんな戯言に頷いていた。きっと冷や汗を流していたのは俺だけだろう。
（妙な集団ではない。ここは本当の狂人達の集いだった！）
外では数万人が現在進行形で飢え死んでいく。ここに来るまでの道を歩けば死体なんて積もる程見つかるはずだ。目の前の憔悴した連中も、どうみても数日で倒れて死にそうに見える。なのに一体何を言っているというのか、まるで現実が見えていない。
「これでもう質問はないのでしょうか」
俺は口を噤んだ。狂人共に対して迂闊に口走ってしまえば殺されかねない。そんな空気を感じ取ったのである。
「では本題に移りましょう。実は現在深刻な問題が生じまして、人員の不足で私達には今ある種を守り切れない事が判明されました。最善を尽くしても足りません。そこで貴方に種を一緒に守って欲しいのです」
「所長！？」
数人が騒めき、顔を曇らせたが、俺には大きなチャンスだった。縄さえ解ければこんな狂人共は殺して脱出できる。
「どうですか？」
「も、勿論俺に出来る事なら協力させて貰う」
「ありがとうございます！　やはり貴方は良い人でした。ではこれを」
イワノフは声を上げて、何かの箱を俺の背中にぶら下げた。そこからは短い縄が繋がっていて、端には取っ手に見える鉄の棒が結ばれている。
「これは一体」
「中には爆薬が詰め込まれています。棒を引っ張ったり、落とした瞬間に中から引火して爆発する仕組みです。簡単に言えば簡易手榴弾ですね」
「何だって！？」
「勿論貴方様が約束をたがえる事はないと思いますが、私達にも保険が必要です。ご理解ください。寝る時は解除してから拘束して、また取り付けるという事にしましょう」
背中の箱から来る重みは砂のようで、確かに同じ量の爆薬に感じれた。本当はどうかが重要なのではない。もし本当なら狂人一人の行動一つに生死が別れるかも知れないという事だ。
「貴方の銃です。どうか間違った使い方をしないよう心がけてください」
リボルバーを手に握らされて尚指一本動かせない。震えながらも男の方を見上げると、イワノフとか言う狂人は先程とはまるで違う目をしていた。憔悴した様子で、殺気すら感じる真っ直ぐな瞳と力強い視線、自信に満ちた表情、本能的に察してしまう。嘘など混じっていない、背中に背負わされているのは本物の爆弾だ。
「これから宜しくお願いします」
数週が経ったが俺は何一つ動きを取れず、拷問に近い真似をされていた。毎日研究者と倉庫を巡りながら目の前にあるのにも食べれない食料を見つめていなければならない。
（手が届く距離、いや手が届くのにも、クソ！）
「不満そうな表情だなユスチンとやら」
今日は特に腹立たしい日であった。ドミトリー・セルゲイェヴィチ・イワノフ、眼鏡をかけた如何にも研究者という顔の男は稲の倉庫を管理していて、ここは手の届く位置に数万を軽く超える粒が保管されている。
「この命綱を手から放す気もないし、腹が減っている人間には今やっている事が拷問に近いという事実を否定する気もないが、それでも君は堂々としていて良いんだ」
俺と会話を持ちかける数少ない研究者の一人であるドミトリーは掠れていながらも明るい声を発していた。何処から来る元気なのか分からないが、この状況では恐ろしく聞こえるだけである。
「未来の為に生きれるのだからとか、そういう話なら聞き飽きたぞ狂信徒が。今飢え死にしている人々が数万はいる。その全をて見捨てているんだ」
「酷い言われ様だな―。第一そういう人々から強盗して

た君に言われる筋合いはないと思うんだけどね」
「それは」
反論できなかった。この数日で分かった事だが、こいつ等はとてつもなく腹立つ連中である。何を言おうとも拳ではなく言葉で人を殴りつけてくるのだ。身体の痛みには慣れているつもりだったが、言葉には表せない暗い気持ちになってしまう。強盗する時と同じ、人を殴る瞬間と同じ感覚を想起させるのだ。
「すまない。もしかして痛い所を突いてしまったかな？」
「生きる為に仕方なくやった事だ」
「そうか。仕方がなかったなら、仕方がないな」
仕方なかった。だからやっただけだ。何も悪くはないはずだろう。寧ろそうしない方があほうだ。何も奪わないでいるから、何かを奪われる。
「そんな仏頂面しないでくれよ。すまなかったって」
「別にしてねぇ」
舌をうつと奴は仕事に戻りながらクスクスと笑い始めた。悪かった気分がより一層悪くなる。
「何笑ってんだ。そんなに滑稽か？」
「まあな。いい歳した奴が子供みたいに拗ねた顔してやんの」
「第一目標が決まった。絶対に殺してやる」
手を出せないとして徹底的に舐られていた。心の中の言葉をそのまま吐き出しながらリボルバーのゴングを引く。しかし奴は横目に見ずに作業を続けた。
「ちっ」
「なぁ、君夢はあるかな？」
「夢？」
「そうさ。夢はないか？」
突然の切り出し、しかしいつもこんな下らない事を聞いてくる。気持ち悪い上から目線で、クソの役にも立たない事柄を喋ってくるのだ。退屈しているならトランプカードでも準備して欲しい。
「そうだな。この倉庫にある稲で飯をたらふく食う事とか夢かな」
挑発するつもりで言うと眼鏡野郎は声を出して笑いだした。
「良いな。それは良い夢だ。いつかここにある全てを使ってこの僕が飯を作ってやろう。ソ連の土地に合う品種改良に成功してからだがな！」
「それはありがたいな。今すぐぶっ殺してやりたくなる」
どいつもこいつも研究者の癖して理解力に乏しい奴ばかりである。
「そんなあんたはどんな夢があるんだ？　言わなくても予想はつくがな」
「君の予想通りさ。ここにある稲作でソ連でも簡単に栽培できる稲を作って、誰も飢えない国にする。そうだな。例えば腹を空かせた子供のない国から作るとしようかな」
聞き飽きた、臭い言葉だった。
「最後まで種を守ってくれればの話だがユスチン。君には一生分の米をあげられると思うんだよ」
「ここいいるだけでも一生分に見えるが？」
「全然足りないし十年も保てない。それに君の妻や子にも一生分となるくらいの量にできる自信があるね」
「家族はないな」
「ならできてからの一生分だ」
「そんな量がでるのか？」
「当たり前さ。見た事があるんだ。この粒粒がたわわに実った水田を。風の形を見せてくれる黄金色の畑を。きっといつかあの光景を我が国でも見れるようになる！」
（またそれかよ）
何時か、後に、戦後、十数年経てば、今腹が減っているのにも見えもしない未来の事ばかりを語りやがる。
「良し。チェックは終了だ。来週にまた頼むよ」
「ようやく終わりか」
数千を超える袋を全部確認しやがってからに、凄まじい時間がかかった。適当に見れば分からないのか、一々袋を手に取って異常はないか確かめる。案外学者という連中も能がない。
「他の研究者の前では喧嘩になりそうで控えるがね。芋類、トウモロコシ、麦と色んな食用作物があるが、断然人間に必要な分を確保している作物は稲だとも。でなくちゃ僕は研究対象を変えたよ。育てるのにかなりの水源が必要になるが、それでも東洋では古来より数百万を養った程の作物なんだ」
倉庫を閉じてから眼鏡野郎は稲の事を語った。全く興味がなくて片耳で聞き流すが、これがとてつもなく鬱陶しい。真上まで昇っていた太陽が傾いて、夜が夕日に染まるまで奴は口を一回も休まなかった。こっちは腹が減って倒れそうだというのに、何処から気力をだしているのかが謎である。
「このパブロフスク実験所を立ち上げたニコライ・バビロフ博士は僕が最も尊敬する植物学者でね。ある両足付いた、歩くゴミのせいで現在はここを離れていらっしゃるが釈放は近い。いずれここに保管されている種がソ連を救えば全世界が真の研究者が誰かを思い知るだろうさ」
「も、もう喋らない方が良いぞ。喋り過ぎると死にかねない。頼むから黙っていてくれ、いや、ください」
研究所内を巡回しながらも数時間は続く話に俺の方が先に気力尽きた。どうにか止めたくて両手を合わせる。

何故口を動かしているのは相手なのにこっちが苦しくなるのか。
「確かに喉が乾いたな。その事でだが、君は酒は何が好きかな？　僕は断然ビールでね。度数が低くて体温は上がらないのだが、歴史が長いだけあって味の整えも良い。それに」
「お願いだから辞めてくれ！」
けれど奴は喋るのを辞めなかった。本気で誰かの口を塞いたくなったのは始めてである。

研究所で見た奴等は総じて十三人くらいだった。その中でも顔を数回と合わせたのは半分だけ。言葉を交わしたのは実験所の所長を含めた三人だけである。連中も、俺のような人間と出くわすのを余り良しとしなかったのかも知れない。
「随分と貴様もやせ細った物だな犯罪者」
「お陰様だ」
エフゲニー・ボルフ、巨躯に見合う大きな手を持ったその男は一ヵ所から絶対に動く事がなかった。中になにが入っているのかすら教えてくれず、ただずっと倉庫の前で銃を握りしめて守っている。
「そのまま死んで土に帰る事を深く願っている」
そしてかなり敵対心を露わにしてくる奴でもあった。
(この方が喋り続ける眼鏡野郎より増しだがな)
「一様俺は協力をしてやっているのだが？　ボルフ、あんた仮にも教養ある知識人様なら言う事があるんじゃないか？」
「意味のある、もしかすると人類の歴史を変えられるかも知れない偉業に、ごろつきの強盗を協力させてやっているんだ。所長のお決めになった事でないなら、貴様のような悪党は処刑している」
「いつかあんたが死ねば、この倉庫の中にある種は全て私が燃やしてやる」
そう言うと鋭い視線を向けてきた。手にしたモシンナガンの銃口が徐々に上ってくる。
「冗談だよ。こんな至近距離で爆発が起きるのは好ましくないはずだろ？」
「勿論、こっちも冗談だ」
大男はそう言って銃身についた埃を拭き取って見せた。だが銃口がずっとこちらの額を狙っているせいで安心できない。
気を張っているとあっという間に腹が減ってきた。研究所の連中は軍から補給されたパンだけで生きる。俺もまたその生活を強いられている訳だが、全然足りない。酒を寄越してくれるのは幸いだが、やせ細ったネズミすら出ない場所ではとても耐えられない。
「ここでは余った食料は食べないのか？」
「余った食料はない。軍からの補給は皆で分けて食べたはずだ」
「倉庫にある方だ」
「倉庫にあるのは種と標本だけだ。食料はない」
「同じだろうが」
「全く異なる物だ。食料は「食用にする物」を差す。中にあるのは食用ではない。つまり食料にはなりえない。食料について語るなら定義を調べて来い」
身体に取りつけられた爆弾が無ければ殴った。最低でも鈍器で頭を殴りつけた事だろう。
「ならその種と標本に余り物はないのか？」
「ない」
「あんなに沢山あったじゃないか。数粒、一粒食べても良いはずだが？」
どの倉庫に入っても同じだった。俺の入ってみた六つの倉庫全てにあらゆる作物が瓶や袋にごまんと詰まっている。
「ダメだ。全て必要な量で、必要不可欠な最低限度だ。これから冬になる。栽培もできん」
「全部一粒ずつ揃えるだけで良いんじゃないのか？」
「どれが発芽して確実に実るか分からない。一粒欠けた事で、この先の研究に支障をきたす可能性がある。もしそれが重要な鍵となる植物だったとしたら、代償は数百万の命だ」
「後ろの倉庫にも、そんな物が入っているのか？」
「他の研究者の前では言えないが、恐らくは最も重要な品目達だ」
確認できないんじゃ何が保管されているか分からないが、一体どれ程の作物が入っているというのか。
(あの眼鏡野郎が言う数百万を生かす稲よりも凄い何かか)
ふと稲の入れてある袋の事を思い出し、そこに張ってあったラベルの絵のような字を床に書いてみた。うろ覚えだが何となく真似てみる。
「何て読むか分かるか？」
「知らん。ソ連の文字じゃないのは確かだが、筆記体って感じでもないし、イギリスのアルファベットでもない。貴様ソ連出身じゃないのか？」
「そんなはずはない。あの稲が入っている袋についてあった文字だ。ちょっとうろ覚えだが」
「字が書けないのか？」
「そもそも読めもしないが」
奴は口を開けて一瞬呆けた。すると「そんな事もある

か」と明らかにこっちに聞こえる大きさで呟く。
「俺はあんたみたいな研究者でもないんだ。字が読めない人なんて寧ろ多いくらいだろ」
「まあそうだが、この研究所にはなかったからな。忘れていただけだ。貴様のような犯罪者は読めなくて当然だな」
「読める奴もいる！　俺が読めないだけだ！」
「分かったから熱くなるな。当然字が読めると勝手に勘違いしていただけだ」
拳を握りしめたその時、比較的近い場所から着弾音がした。二人同時に廊下に伏せて、何処からの音なのかを把握する。
「この近所は余り爆撃が落ちないんじゃなかったのか？」
「「余り」と言っただけで「落ちない」とは言ってない。それにここは研究所の一番外側だ。爆撃に見舞われる確率はほんの少し高い。破片もたまに飛んでくるしな。窓を塞いだのは冷気を塞ぐ為もあったが、基本的には爆発の衝撃で割れるからという理由が一番大きいんだ」
「危ないじゃないか！」
死にそうだから協力しているのに、砲弾で死んだら元も子もない。
「そうだが？」
「一旦避難して来れば良いだけの」「ダメだ！　ここを離れるのは許されない！」
話を終える前に奴は遠くからの爆撃に似た大声を叫びながら俺の頭に銃口を当てた。咄嗟にこっちもリボルバーを突き出したが、怯えた素振りも見せない。
「なんなんだいきなり」
「あの倉庫は最も重要な品物が保管されていると言ったはずだ。貴様みたいな犯罪者が来て、盗んでいってしまったらどうする！」
上空からの爆撃が地を揺らした。数分間振動と轟音が続き、本来の何倍もの長さに感じる時間が恐怖を煽る。
「熱くなるなよ。先ず命だろ」
「先ず命だからこそだ。ここを離れる事はできない」
銃口を互いに向けたまま睨み合っていると、終いには廊下の先で砲弾の破片が木の板と窓枠をぶち壊してきた。轟音が建物中に鳴り響き、廊下に吹き荒れる冷たい風と共に小石が襲ってくる。着弾してはいないようだが、破片が飛んできたのだろう。
「まだ倉庫は無事だ。が、しかしそれは問題じゃない」
「当たり前だろうが！　今爆発に巻き込まれる所だったんだぞ！」
「違う。そうじゃない。壁が崩れて賊が侵入する可能性が高くなった。さっさと補強するぞ」
「はぁ？」
奴は身体を覆った土埃を叩き落とす事もなく、崩れた壁に駆けつけて行った。俺は文句をいう間も与えられず連れていかれる。
「遅れての爆撃が落ちてくるかも知れないんだぞ！」
「貴様の言う通りだ！　近くにもう一度爆撃が落ちて倉庫が壁ごと破壊されるかも知れん。早速取り掛かろう」
「そういう意味じゃなく」
(頭可笑しいにも程があるだろ。まだ爆撃は終わってないんだぞ！？)
遠くの上空からエンジン音が降り注いだ。まだ地面は揺れていて、爆発音も近い。にも、グレイベルは迷う事なく俺の背中に繋がっている縄を手放して駆けつける。どうにか落ちる寸前に受け止めた物の、後一歩で爆死する所だった。
「俺を殺す気か！」
「さっさと資材を集めろ。空いた穴を防げる分が必要だ。小さい物だと爆発時に寧ろ危険になるぞ！」
聞こえてもいないのか、外に捨てられていた大きな鉄板等をあちらこちらから引っ張ってくる。
しかしその必死な態度が仇になった。俺に取って凡そ一ヵ月ぶりに訪れた、もう来ないかも知れない機会を作ってしまったのである。
(逃げよう。ここに居ては命が幾つあっても足りない)
そう思った矢先、踵を返して資材を集めに取り掛かった。数人の話声が工具を揃えて駆けつけてきたからだ。
数週間前なら良かった。そのまま逃げても別の地域まではいけただろう。が、こんな腹を空かせた状態の徒歩では恐らく半日ももたない
俺はようやく訪れた機会を唇を噛み締めて手放すしかなかった。
「壁が崩れているぞ！」「直せ。今すぐに！」
そんな時だった。遠くから目に捉えられない程に速い何かが近くに落ちてくる。流星のような爆薬の塊が瞬間的に地面を揺さぶり、俺は轟音に打ちのめされた。真っ白に染まった視界が戻って、自分が再び地面にぶっ倒れていると気付くには少々時間を要する。
「な、なんだ一体。砲撃、かなり近い」
今までとは比較にならないくらい近かった。立ち上がってみると実験所周りの森に大きな穴が出来ている。そこには数本の木々を完全に消し飛ばし、地面を刳り抜いたような痕だけが残っていた。
「あのいけ好かない野郎はどうしたんだ？」
土埃が寒い風に乗って晴れていく。その先では奴が資材を両腕に抱えたまま地面に俯せていた。背中に大きな

砲弾の破片を刺されたままに。
「ア」
目に見える程の破片が深く刺さってしまっている。抜いたら出血で死に、そのままにしても助かるはずがなかった。ここに凄い医者と薬品やらがあればともかく、食料もない場所に何があるというのか。
だがしかし、奴は膝を震わせながらも立ち上がった。集めた資材を抱えたまま、崩れた壁の方へと足を進ませる。
「バカな。あの傷で？」
けれど数歩動いて、予想通り膝から崩れ落ちてしまった。駆けつけてみると、その瞬間に大きな手が胸倉を掴んでくる。しがみ付くような強い指の力、そこには確かに息絶える寸前の必死な意志が宿っていた。
「守れ。倉庫にある標本を。もっと安全な場所に、壁を補強してでも！」
「倉庫何て気にしている場合か！　今死ぬかも知れないんだぞテメェーは！　この血でもどうにか止めないと」
「死んでも、活かさねばならない。数十数百数千万、億に至る人々の為に、未来の為に。早く標本を、標本を守らね……ば」
両腕にあった資材を俺に渡して、大男の全身から力が抜けていく。しがみついていた指も剥がれ、意志の込められていた瞳は光を失った。やがて冷たく凍えた地面の上に背中を当て、白い大地を真っ赤に染めていく。
他の連中が着いたのはその後であった。結局大男の最後の言葉を聞けたのは、誰でもない俺だけなのである。
「ボルフ、大丈夫か！」
「寄りにもよって砲弾がこんな近くに落ちるとは！」
人が死ぬ姿を見るのは、決して始めての経験ではなかった。飢えて死に、銃に撃たれて死に、この手で殺した事だってある。のにも、そのどれとも違った感覚だけが残っていた。まるで奴の意志が手についた血から伝染してしまったように、べっとりとして静かに伝わってくる。
(何にそんな必死こいてんだテメェは)
人が死んだ。ただ飢えを解決する為に他人の物を奪うような強盗でもなく、生きる事を諦めて首を吊るした連中でもない。叶わないと誰もが思うであろう夢なんて抱きやがって、何かを守り続けていた「人」が死んだのだ。
「ボルフ、あんたこんな奴に任せるとか。頭悪いだろ」
べっとりとついた血に、俺の身体が勝手に動きだす。駆けつけてきた研究員の連中から道具を奪い、夢中になって壁を塞ぎ始めたのだ。「何故」と自問自答を繰り返しながらも手を止める事ができなかった。
自分の背中に付けていた爆弾から伸びている起爆装置が落ちている事に気付けたのはその後の事であった。

砲弾はもう降ってこなかった。倉庫の標本は壁も塞いだお陰で、一様は冷気からも守られたと言える。
それからという物、俺は何故か手錠もなしに植物管理に付き合わされていた。相変わらず研究所の人々はつまらない作業を、腹にまともな物も詰め込めずに延々と続けている。一緒にいると気を落してしまいそうなのは俺だけかと叫びたくなる日々だ。それでも
(まぁ監視されない分には息苦しくなくて良いな)
「まさか、あれが偽物だったとはな。危ないとは思わなかったのか？」
「万が一爆発して植物が怪我でもしたら、その方が問題だよ」
眼鏡野郎、ドミトリーは手を休まずに返答だけをぽっと投げた。
「ん、まぁ俺には分からないがな」
不思議かな。納得のいく説明だったと思う。腹が減って判断力が鈍っているのか、怒る気力も残されていないのか、無心に頷けた。
「それにもう辞めないかその話。もう二週間はぐずぐず言っているじゃないか。以外と根に持つ性格なんだな」
「爆弾背負わされて根に持たないのは、それはそれで異常極まる性格だと思うがな」
いつものような長話に付き合わされ、またそれに適当な返しをしていく。そうしながらも指示通りに作物の入った袋を運んで奴に渡したり、単純作業だがやる事が出来た分に退屈凌ぎになった。
「思い詰めるのはかなり疲れる力仕事だ。研究が頓挫したり、所長に怒られたり、全然仮説と違う結果が出たのに理由の見当がつかなかったりする時とか、思い詰めるとキリがない」
「どうも経験談に聞こえるのは気のせいか？　というかそういうテメェは毎日毎日喋っているのに疲れないのか？」
「疲れるよ。疲れないはずない」
「だったら何でそんな口数が多いんだ？　早死にしたくなければ程々にしろ」
そんな事を口走ると驚いた風に目を大きく見開いた。
「何だ？」
「君に心配されるとは以外だな」
「そうそう心配しているから、少しはお喋りを減らしてくれ」
適当に流して黙らすつもりだったが、眼鏡は話題を育てて話を続ける。

「実際何故話を止めないのかと聞くなら、理由なんて決まっている」
(俺の話を全然聞いてないだろテメェ)
「喋るのは子供の頃から好きだったんだ。だが多く喋るには多くを知って居なければいけない。沢山の勉強を積み重ねなければならない。つまりはやりたい事だから。その一文で説明は完結される」
「やりたい事？」
全然一文ではなかったが、久しぶりに聞く理由だった。少なくともチンピラや強盗やっている時「これがやりたい事だった」何て言う狂った奴は見た事がなかったからではあろう。
「そう、やりたい事。人はやりたい事にこそ生きる実感を得られるのさ。いや、僕は哲学には造詣が深くないから経験談のような物に過ぎないけどね？」
高尚な言い方をする物だ。思わず鼻で笑ってしまう。
「だからここを守っている人々は全員が全員我慢強いってのか。こんな場所に閉じ込められているのがお前等のやりたい事だったなのか？」
「はは！　成程、確かにこの状況に陥りたかったかと問われたらそうじゃないな！　何だ君、結構ユーモアセンスがあるじゃないか。またもや見直したぞ」
「いや、そういう意味じゃなかったがな」
皮肉をしたのに大笑いで返されると、何て虚しいのだろうか。
「だがね。環境というのはどうにもならない。変える事はできるけど、どうせ変えられる力を持った頃には元いた問題も解決できちゃうからね。もし戦争を止められたらどれだけ良いか。誰もがたらふく食べ物を食べられれば、暖かい場所にいられたらどれだけ楽か」
「だったらどうすれば良いんだ」
結局限りを尽くしても、あの大男は死んだ。最後の最後まで自分が守った物の最後すら見届けず、流れ弾の破片に殺された。あんな最後ができる限りを尽くした果てだとするならば、そこに意味はあるのか。
視線を降ろすとあの男の姿が浮かんできた。手にはまだ血の温かみが残っている。それは生涯始めての経験であり、起爆剤のように今まで侵しては目を逸らしてきた感覚を想起させた。
「知ってるなら教えてくれよ。どうすれば良かったかを」
数十秒経ってもお喋りな眼鏡、ドミトリーはは何も語らない。不思議で視線を上げると奴はただニコリと微笑んだまま俺の肩を叩く。
「明日答えても良いかな。ちょっと喋り過ぎて疲れたよ」
「散々言ってきたじゃないか。アホくさ」
「悪いね。だから自習時間としよう。僕が教えるまでに自分で考える事。どうだい？　退屈凌ぎには丁度良いだろ？」
「それなら出来そうだ」
冷静になってようやく自分が妙に熱くなっていたと気付けた。そのまま風を浴びに倉庫を出る。
またおかくず混じりのパンを口に、酒を飲んで微かな温かみを感じて、一晩中自分自身について考えた。やってきた事とか、今出来る事とか、これからの事とか。
しかし幾ら考えても「どうしたら良いのか」という問いの答は出ない。こんな状況に立ち向かう術を何も思い浮かべられないのだ。
「ただのチンピラが今更何が出来るっていうんだ」
結局答を導き出せぬままに夜は過ぎて行った。ようやくという感じに返答を得る為ドミトリーの部屋を訪れる。
「おい眼鏡、約束だぞ。後わざわざパン持ってきてやったんだ感謝しやがれ」
冷気の入らないように窓を塞いだせいで、朝の日は一切差して来ない部屋だった。外から聞こえる砲撃の音もないせいで、息の音すらない静寂だけが霧のように寒い空気と共に足元を満たす。無情な事にも、その静かさと寒さは慣れたそれだった。それでも出来るだけ不遜に、無礼に、無心に悪態をつく。
「クソ眼鏡野郎が。答を渋っておいて逃げたのかよ」
部屋を埋め尽くしているのは棚。棚を埋め尽くしているのは稲の袋達。その前には膝から崩れ落ちた男が一人、深々と首を落していた。地面から罅の入った眼鏡を拾うと、既に聞こえもしない奴に向かって言葉数が増える。
「やりたい事がない人間はどうすれば良い。ここにも、外には多いだろ。そういうのが見つからない人々が。明日食べる物もなくて、夜は寒くて、死んでしまいそうで、何も考えられないような、そんな人が沢山……」
自分で口にしていた言葉の最後を飲み込んだ。一体外とここが何が違うというのかと自分に問うてしまった。
毎日腹が減って、死にそうなくらい寒くて、しかも手の届く場所にそれを解決できる物がある環境。毎日聞こえる砲撃の音まで、酷い事はあってもマシな点は一つもない。
「いや、何でもない。自習、だからな」
掌で瞼を降ろして楽な姿勢に寝かした。そこでようやく奴が満足げに微笑んでいると気付く。一体内蔵の千切れるような空腹感の中で、どんな思いをすれば微笑んでられるのか気が知れない。
「気は知れないが、確かにやりたい事が出来たぞドミト

リー。あんたが言っていた黄金色の畑、凄く見たくなっちまった」

それからまた数週が経つ。冬の寒さは増し、研究所にいた殆どの研究員は俺が知らない内に減っていった。大半が餓死で、各自自らが担当する植物に指一本触れぬまま死んでいったのである。

最も寒い冬が本格的な猛威を振ってきた時だった。軍から実験局に対して種や標本等を運ぶ許可が降りたのである。お陰で始めて所長であるニコライ・イワノフさんの叫び声を聞けた。

「ほ、本当ですか！　本当に許可が降りたのですね！」

「許可ってまさか！？」

既に研究所に残されていたのは最初の半数以下の人員だったが、誰もが残された僅かな体力で笑みを浮かばせる。

「それじゃ包囲が解けたのかよ」

「いいえ。包囲は続いています。ですが冬の寒波に寄って都市の北部にある湖が凍ったようで、道を代われる程の氷盤ができたそうです」

「最悪の環境で、最高が実ったって訳か！」

軍からの支援は少なかったが、それでも全ての種と標本を含めた元所長の手記をトラックに乗せられた。涙が流れそうなくらいの嬉しさが満ち溢れる。こんなにも大きな幸せが許されるのかと、思わず笑ってしまうくらいだった。

準備を終えて自分も退避する為移動しようとしていると所長が俺を止める。

「何だ？　まさかとは言え一人が乗る空間もないとか言わないよな。それとも罪を償えとかの話か？」

「いいえ、トラック数は十分ですし罪を償わせるのは判事の仕事です」

確かにそんな様子でもなかった。俺の事を、そもそも軍にも伝えていないらしい。案外抜けている部分が多い連中だ。

「けど運転の出来る専門兵力が酷く足りないようで、民間人でも運転できる人に運送を任せたいとの要請です。そして、私も乗るトラックには気力ある方が運転して欲しく思いましてね」

「回りくどいんだよ一々。学ある方々の悪い癖だ。こき使いたいんならそう言え」

「使われてくれるんですか？」

「今出来る限りをやるだけだ。どうせこんな場所で閉じ込められていたって、生き残れるはずもないからな。それに軍に言いつければ打つ手もない」

だから、詰まる所仕方ないという事だ。俺としては真っ平ごめんだが、半分脅されていてはしょうがない。

所長とトラックに乗り込んでエンジンをかける。久しぶりの運転で感覚は鈍っているが、何もない氷の上で事故る程でもないはずだ。最後に窓から首を出して荷台の荷物が大丈夫であるかを確かめる。

「つくづく偶然に塗れているな」

荷物は見慣れている箱だらけだった。

(ちゃんと届けてやるよドミトリー、次いでにテメェーの標本もな。あくまで俺の目的の為だがな)

「どうかしましたか？」

「いいや、問題ない。望むところだ」

戦闘車両に付いてトラックが進み始める。

都市の最南部に当たる研究所から、最北部の更に上に位置する湖まで、不思議なくらい静かな道のりだった。

爆撃が落ちる様子もなく、当然と言えば当然だが軍の車両を真昼間に襲撃するような連中もなかったのである。それに長い寒さと戦争で気力の限りを尽くした人々は、ただ只管北方へと足を進ませていた。俺と同じく包囲された都市を抜け出す為、掠れてしまいそうな希望を抱きながら。

行進が続くこと数時間が経った。トラックを走らせた先にあったのは凍った湖。向こうから微かに見える土地までに続く氷と吹き荒れる吹雪である。常に雪を片付けているそこには補給品などを積んだ数台のトラックが行き来し、脱出を試みる人々の列ができている。

持ち合わせている全ての布で身を包んで体温を維持している人々は円筒方の像にも見え、その大小が手を繋いで歩いている様子が目に焼き付いた。

またエンジンの音が近づいてきた。所長は天に目を向けて舌を打つ。

「ここはドイツ軍としても狙い目のようですね。唯一ある補給線だから当たり前ですが」

「思い詰めるなって。疲れるだけだぞ」

常に鳴り響くエンジンの音は止む事を知らない。敵軍の爆撃機は虎視眈々と爆弾を落す機会を窺っていて、だが俺達に逃れる術もなかった。それでも強がり混じりに鼻で笑って見せる。

「その通りですが、呑気してる場合でもないようですよ運転手さん？」

所長が指差した場所に目をやると爆弾に当たって割れた氷盤に沈んだトラックの残骸と荷物が浮かんでいた。氷で支えられている上に爆撃が落ちた時の保険に先頭車両ともかなり距離がいる。つまり爆弾に当たろうが、空

いた穴に落ちようが助けはないという事だ。
「ひぃッ」
(これじゃ水に溺れた時点で凍え死ぬだろうな。腹も空かしているのに保てるはずがねぇ)
「軍が常に事に備えてはいる物の完璧な訳もないようで、細心の注意が必要そうですね」
「生命を運んでいるのに、道は死で溢れているとかブラックユーモア過ぎるんじゃないのか？」
冬だからこその滑ったい道、所々空いている死の穴、何時落ちてくるか分からない爆撃。成程ただトラックの車輪を転がすだけの仕事と言うには危険過ぎる。
残骸を目に、命の危険を感じては見返りが欲しくなった。
「一杯の飯だな」
「はい？」
保険なしじゃどうにも落ち着かず、俺は最も権力ある所長に成功報酬の話を持ちかける。
「できてからの家族の分までだ」
「何の話ですか？」
「ドミトリーに、眼鏡野郎に言質取ったからな？　積んである稲を育てて貰うという言質。「長」なら部下の約束は守れ」
始めて少し悩ましい気な表情を浮かばせて一分程顎に手を当てて考えこんだ。自分の緊張を解す為の方便だったが、冗談として受け止められなかったらしい。
「おい、そんな真面目に」
「良いでしょう。パブロフスク実験所の現所長として責任を取ります。現在ソ連の科学を切り崩しているトロフィム相手にのどこまで種達を守り切れるのか自信に欠けますがね」
難しい話は分からないが、取り合えず俺の食い口が確保された瞬間だった。同時に薄い吹雪の更に向こう側から薄ぼんやりと関門のような物が見え始める。
「検閲所が見え始めました。このスピードだと一時間たらずで行けそうです」
一息つく所長だったが、俺は一人ハンドルを強く握りしめた。吹雪の中を貫いて聞こえるエンジン音と微かに空気を切り裂くような音、そんな自分でも察知できないような情報が「感」としか説明しえない何かの形を取る。背筋が凍って手が汗ばんだ。
「どっかに捕まえとけ、何か妙だぞ」
「なにが」
氷の道の上に爆弾が落ちてきた。吹雪と爆撃機に怯えた人々の騒めきで掻き消された音を一気に拡散させるような轟音で、地表の代わりとなっていた氷盤を揺さぶる。凪払われたように人々が膝を突き、飛んできた氷の破片が車体にぶつかった。そんな爆弾の投下が数十秒と俺達の首を絞めつけて呼吸を止める。
「幸い当たってはいないようですが」
遠くに動いている先頭車両を見ると着弾したトラックはないようだ。が、途中に大きな罅が出来てしまった。距離を取りながら迂回するのが得策だろう。
「けど、問題はそこじゃないようだな」
俺は両掌を広げて上げた。所長も周囲に集まってきた、銃や斧を持った連中を横目に同じく手を上げる。
運転席の窓からどことなく聴き慣れた低い声が、小銃の銃口を向けてきた。男を目にした瞬間、冷や汗が流れ出す。
「今すぐトラックから降りろ。でないと撃つぞ」
「ッ、あんたは」
男は長い髭と白髪を生やして、赤ずんだカーキ色のロングコートを着込んでいた。サーヴィチ・アブラモフ、決して忘れる事のできない、俺の所属していた強盗団のボスをしていた男である。
「アブラモフさん」
「まさか、お前ユスチンか？　随分と憔悴した様子だな」
「貴方も、ご無沙汰とはとても言えませんね」
車から降りると敵は小さな微笑を浮かばせた。仲間だった俺を歓迎する笑みであるならまだマシだっただろうが、そこには嘲笑うかのような厭らしさが込められている。
所長もある程度状況を把握してしまったのか、眉を傾けて額に皺を寄せた。そんな中後ろから連中の一人が荷物を見つける。
「アブラモフさん！　このトラック食料運搬中だったようです！　穀物が荷台に一杯ですよ！」
「触れるんじゃねぇー！」
咄嗟にリボルバーを取り出して奴に向けると冷たい鉄の塊の先が髪と耳元を撫でおろしてきた。
「銃を下げろユスチン。脳みそを浴びていると検閲所で疑われかねない」
見知った顔数人、見知らぬ顔数人と十人に至る強盗団の連中が武器を取り出す。残念ながら俺の味方はなく、武装の先端が向けられているのは一ヶ所だけだった。
「半年に近い間、何処で何をしてたかと心配していたよ。まさか軍に入隊でもできたのかね？　一緒に行動していた仲間を売って？」
「そんな事はしていませんが、一言で言えばやりたい事をしているだけですよ」
目玉を転がしながら周囲に兵士はないかと探るが、吹

雪に爆撃が重なってそれどころじゃないらしい。正直何処にいるのかも見えない。
「どうやら合えなかった数ヵ月で随分と複雑な事になったようだな」
「話すと長くて、こんな所じゃ語り切れません。先ずは退避してからはどうでしょうか」
「さてな。そんな良い考えには聞こえないな。寧ろここで全てを片付けて退避する方が利得なんじゃないか？」
どうにか声を絞り出して笑って見せるが、ここから逃がす気は微塵もないらしい。向けられた銃の引き金に掛けられた指へ全神経を集中させ、どうか指を滑らせないでくださいと祈る。トラックから降りたから二人同時に撃ち抜かれるって事はないだろうが、所長が連中相手に戦えるとも思えない。俺が死ねば運んでいる種子は連中の晩御飯になり下がるだろう。
(数的にも不利過ぎるだろうが、こんなの)
十人相手に一人でどうしろというのか。
「辞めよう」
どうやればこの状況を抜け出せるかと頭を回していた最中、アブラモフさんがニッコリと微笑んだ。曇りなき笑みが如何なる時よりも恐ろしい。
「共に戦ってきた戦友を失いたくないんだユスチン。君にはまた我々と共に行動して欲しい。殺し合うより数倍良い判断だろ？」
何も言えなかった。
「何も考えずに「はい」と言うだけで良い。深く物事を念頭に入れる事なく首を縦に振ればそれで良い。君はいつもそうして来れた。きっと今もそれが出来る。今すぐ殺されるのと生き残る事、どちらがより良いかくらい分かるだろう？」
ライフルを渡すようにと手が差し伸べられる。それは思わず指の力が抜けてしまう程に魅力的で、頭の中を真っ白にできる程に誘惑的な言葉だった。
(確かに否めないな)
自分の飢えを解決できれば他はどうなろうと構わない。奪われた側の事は考えない。これからの事も今までの事も頭から掻き消す。結局できなかったけど、それは気楽だ。
「確かに何も考えないでいられる間は気持ちの良い時間でした。今ある飢えだけを解決する、その一瞬の幸福には抗えなかった」
「良い判断だ。君はそうしてくれると信じていた」
リボルバーの銃口を降ろして差し伸べられた手に運ぶ。銃身が自分の手に、その手袋に触れた時確かにアブラモフさんは断言を口にした。
「油断は、必ず断言の後を継ぐ物です」
引き金を引くと同時に頭に向けられていた銃口の方向を無理矢理変える。二つの発砲音が鳴り響き、リボルバーの弾丸がアブラモフの腹を抉り、モシンナガン小銃の弾丸が種子の箱に手を出した奴の腕を貫いた。
耳元の銃声で右の鼓膜が弾けたが、考える暇もなくトラックのドアを叩きつける。
「さっさと走らせろ！」
とても短い間、瞬きする間程、悩み事その全ての思考から切り離し、所長はハンドルに手を伸ばした。アクセルを片足で踏みつけて正しい選択をする。
痛みと怒りで顔を歪ませたアブラモフは呻き声よりも先に命令を下した。俺は地面に身を投げて車体の下から見える足を撃ち抜く。荷物を取り戻したトラックは徐々に迂回を試みた。
「二人纏めてぶっ殺せ！」
「全員纏めてぶっ殺す！」
身を低く構えながら全ての服を脱いで投げつける。氷盤の上で骨身に染みる寒さが襲ってきた三、四重に太い生地の服を着込んだ連中より一早く動けた。
こちらに武器を向けている連中から先に頭へ風穴を空けていく。トラックへ逸れる注意、いざという時には逃げてしまおうという心、俺にできるのは若干の隙ができた敵を殺す事だけだった。
「共に戦った友情を鑑みて、一撃で頭をかち割ってやろうじゃないか」
三発を三人の眉間に命中させていると横から立ち直ったアブラモフが斧を振り下ろしてきた。再び銃を向けるも決して届かない事に気付いた俺は左手を前に、地面を蹴って逆に突っ込んでいく。
氷点下に達する冷たい鉄の塊が左腕に突き刺さり、激しい痛みと共に神経を凍らせて砕く、嫌な感覚に狙いが逸れた。銃弾はあさっての方向に飛び、寧ろ連中の一人が撃った弾丸が額を掠っていく。忽ち視野の半分が真っ赤に染まった。
(皮膚が裂けたのか。腹が減って嫌なくらい疲れやがる！)
だがアブラモフという、集団のリーダー格に近づけた好機だけは逃さない。銃を持つ右腕を奴の首に撒きつけ、抱き締めるような形で全体重を負担させた。必死という風に千切られた額を拳で殴りつけてくるが、既に吹雪の冷たさで感覚もまともに感じれない。
「離れろ！」
「友情を思って一緒に死のうじゃないですかアブラモフさん！」

人間盾に銃を撃てず戸惑う奴等へ遠慮なく引き金を引いた。痛みに耐えられるように、寒さを凌げるように、空腹に蹲る事のないように、息を止めて正確な狙いを定めていく。息を止めて撃った残り三発の弾丸は不思議なくらいに良く当たった。

(五人目!)

「離れろと言っている!」

奴が斧を捻ると俺の左腕から「びりっ」と何かが引き千切られるような音が鳴る。低すぎるせいで傷口に凍り付いていた斧の刃が、腕の筋肉事千切り取られていったのだ。

「アアッ!」

神経を根こそぎ千切り取るような痛みにはとても耐えられず、身体が反射的に相手を手放して距離を取る。直ぐに強盗の一人が撃った弾が足を抉った。

直ぐにアブラモフが斧を振り下ろしながら畳みかけ、俺の腹の上に乗っかる。銃には弾丸もなく、片腕でできるのはせいぜい振り下ろされた腕を掴んで耐える事だけだった。

「やはり貴様はこっちの方が性に合っているだろ?」

力を振り絞っても止める事すら叶わない。段々と鋭くも重たい斧の刃が目前まで近づき、そこへ更に体重が乗せられた。

「我々は一緒だ。所詮毎日何も考えず生きてきた人間に、今更何か正そうだなんて不可能。何故なら! 貴様は衝動に任せて生きる楽さを誰よりも知っているからだ」

目の下から冷たい感触と鈍い痛みが徐々に伝わってくる。

「どうだ今は。ただ奪われるだけの自分に嫌気が差すだろ? 今まで見てきた悲惨さを自分の中から見てしまうだろ!」

只管持ち応える事だけに専念していた時、再び吹雪を凪払う爆発が起きた。氷の道を砕く爆撃は小さな破片を放射状に飛ばす。即席に作られる氷の手榴弾は地面を這いでいる者より、上に乗っかっている方を狙ってきた。車のドアを強く叩く勢いを乗せた拳サイズの氷がアブラモフの側頭部を強打する。

「ウッ!」

人が襲われているにも助けに来る気配がなかった。補給路を守る軍人がそこら中で気を張っているのにも誰も来ない。それだけの理由があるはずだと気付くにはそう掛からなかった。

「例えばそう、この道の空襲は一回で終わらない事を軍は知っていたのかも知れませんね」

空襲は強盗達も民間人も軍もお構いなしに全てを巻き込んだ。道に大きな穴が出来た事で避難路も大騒ぎに巻き込まれている最中、俺はモシンナガン小銃を拾って松葉杖の代わりに立ち上がる。左腕には感覚がなく、視野の半分は赤に染まり、片足もまともに動かない。色んな所の皮膚も氷盤の上に寝転んでいたせいで剥がれてしまった。しかしかなり酷いのは相手も同じで、かち割られた頭から血が流れ出ている。

「分かっていたというのか。こうなる事を」

「まさか、ただこうなって欲しいと思って耐えただけです。もう一分遅れたら俺の頭は半分に割られていたでしょう」

あの場の誰もがそうだった。諦めても誰も何も言わず、諦める事を気付かれる怖れもない場所で、皆がそうあって欲しいと思って耐えていたのである。

天に上がる白い息が薄れていき、絞り出すような声を漏らす。

「一人で生き延びるつもりか」

一台のトラックの車輪が湖に落ちてしまいそうになっていた。氷盤が砕かれた事で後ろの車輪が嵌まったのである。

「本当は死ぬに値するのに、少しでも長く生きていたくなりました」

アブラモフと俺の視線が一ヶ所に向けられた。すると気が抜けたような溜息を最後に、一人の吐息が途絶える。

「あっそう」

傷口からの血が止まらなかった。昔なら塞いだはずの掠り傷すら、そういえば最近治らない。それでもただ銃を突き立てて一歩を進ませる。鉄よりも重くなってしまった足は地面から離れてくれず、目の前は揺れて地震でも起きているようだった。

「俺はな。まだ」

「トラックから降りろ!」「沈んでしまう!」

「まだ種とか作物とか、それが後々なにかを救うとか」

騒いでいる人々の列を一直線に歩き抜けて、今にも割れてしまいそうな氷の上に立ち止まった。抜け出せずにいる車輪と、その車輪を捕まえている割れた氷の間に小銃を挟む。

「あんた危ないぞ!」「湖に落ちてしまうよ」

「そういうの分かんないけど」

片足を銃床に置き、右手を荷台の下に入れ、歯を食いしばって今ある全力を絞りつくした。左腕から、額から、片足から黄色い油と血が共に絞り出される。

「そんな俺でも! 最後に人らしい事くらいできるんだよォ!」

テコに人力が加わり、氷の道が割れると共にトラック

が前に進めた。不安定ながらもどうにか速度を上げて、罅割れていく氷盤の上から離れる。
　顔を上げるとトラックの荷台に乗っている人々の顔が目に入った。ボロボロの夫婦と小汚い少女が一人。一度たりとも忘れた事のない彼等は俺の顔を忘れてしまったのか、頭を深々と下げて感謝してくる。
「バカな奴等だな」
　横たわってあっという間に遠くなっていく荷台を眺(みつ)めた。いつまでもこちらを心配そうに見やる三人に、その必要はないと伝えたいのに声が出せない。俺がどんな人間なのかを教えてやりたいのに、自分を指す為の指を動かせない。
　しかし人々を乗せたトラックが検閲所を通過していくのを眺(なが)めながら久しぶりに、いつだったか覚えていないくらい昔からの、懐かしの感情を引っ張ってきた。唇の端が耳元に届くんじゃないかという風に釣り上がり、心配事も後悔も情けなさも払拭させてくれる感情に溺れる。
「また人が水に落ちたぞ！」
「血が出過ぎている。これは流石に……」
(うるせぇな)
　誰の声も届かない暖かさの深くへと潜っていきながら、瞼の裏に見た事ない風景を描いた。
　黒い雲はもう何処にもいない。遠く向こうに見える高い山々から眩しい日が昇り、色鮮やかな果物が実って、色とりどりの花で埋まった野原が続く場所。そこでは綺麗に透き通った川と黄金色の畑が風を象る。
　ぼんやりしていて、不確かな風景はと、ても美しくて目を離せられなかった。自分の居場所がないと知っていても尚、どうにも諦めきれない。結局約束した報酬も受け取っていないのに、不思議とお腹が一杯で悔しさは沸かなかった。
　今、現在、この時、一瞬、刹那、決して抱いてはいけないような、許されざる気持ちを抱いてしまう。散々他人から奪ってきた人間が持つに相応しくない、今までの人生を満ちていたと誇ってしまいそうな、俺はそんな「幸福」を実らせてしまったのだ。